

「大家族村」のみんなの安全を祈る ～五個荘石川町「二百十日祈願祭」～

五個荘石川町は、人口63人、18世帯で、高齢化率約27%の自治会である。五個荘地区では人口と世帯数が最も少ない自治会で、組は設けられていない。毎年9月1日に「二百十日祈願祭」を催し、「大家族」石川町の人々の安全と無事、そして幸せを願って集う。

1. 二百十日とは

「二百十日」とは雑節（季節の移り変わりを的確につかむために設けられた特別な暦日）の一つである。

「節分」や「彼岸」、「社日」、「八十八夜」、「土用」などがあり、「二百十日」が立春（2月4日頃）から数えて210日のことで、毎年9月1日となるのである。ただし、閏年は8月31日である。

この頃は稻が開花する時期であるとともに、台風に見舞われることも多い時期である。農家にとっては油断のならない“厄日”として戒めたのである。

二百十日を中心に、台風の被害を受けないよう、山形県若宮八幡宮の「若宮八幡宮風祭り」や、富山県八尾町の「おわら風の盆」等、全国各地で祈願祭が開催されている。

2. 五個荘石川町の二百十日祈願祭

五個荘石川町（以下、石川町）の「二百十日祈願祭」では、町の氏神様である大将軍神社に百灯を灯し、御神酒をお供えして住民が災害に遭わないようにお参りする。そして、そのお下がりを頂戴して酒の宴とする。

酒の宴は、集会所で催される。

自治会長から災害がないように、そして町の安全と繁栄を願う言葉があり、そのあとは町の長老から順番にお神酒を回し、出席者がお神酒をいただきながら、話を弾ませる。

お神酒のみでビールや焼酎等の他の飲み物はない。本来は白い陶器の「かわらけ」の盃であったが、今年はコロナ禍で紙コップとなった。

以前は、「当家の宿」という習わしがあった。これは、その年の当番の家が、宴のご馳走を振舞うというものである。平成10年（1998）か



大将軍神社の二基の百灯



右が集会所で左に大将軍神社がある。

らは、その習わしを止めて、幕の内弁当やオードブルをとるようになった。

「宴」は、町内の各世帯が寄って、各家庭での災害対策の方法を話し合ったり、災害で停電が起きたときのような夜になるのかを体験したりする年に1度の「防災会議」の場となっている。

近年、自主防災組織も立ち上げ、町の人々の安全・安心と防災・減災への取り組みを進めている。自主防災組織は、「二百十日祈願祭」の日に立ち上げた。

石川町の「二百十日祈願祭」がいつから始まつたのかは定かでない。町の長老が物心ついだころからあったというので、少なくとも80年以上前から行われているものである。

関東大震災が1923年9月1日に起こったことに因み、9月1日が「防災の日」となったことはよく知られているが、石川町の「二百十日祈願祭」は、各地の祈願祭の歴史をみると、関東大震災より前から営まれているといえる。



「百灯」の近景。いつから石川町にあるのかはわからぬ。中は3段で以前は1段に3つの「かわらけ」に油をいれて灯心（とおしみ）に火をつけて灯した。今は電球である。



今年の宴の様子。紙コップでお神酒をいただく。マスクを着用して会話をしている。

3. 繋がりを受け継ぐ

石川町では、二百十日祈願祭の他にも、地蔵盆や獅子舞、春祭り、および、伊勢代参といった、町の人々の幸せを祈願する、あるいはしていた行事がある。

例えば「伊勢代参」は、平成22年（2010年）まで続いていた行事である。石川町ならではの方法の「籤引き」で一番籤と二番籤を引いた人が伊勢神宮に日帰りでお参り～代参する。三番籤を引いた人は代参の「補欠」となる。

代参をしている2人の家庭に他の家庭から「留守見舞」として食材が届けられる。その食材を代参している家庭が調理をする。そして、自治会館で、代参から戻った2人から報告を受けて、みんなでその料理を頂くというものである。

こうした年中行事を通して、町の人たちの共通性が強まり、繋がりが深まっていった。

現在は、廃止された行事もあるが、長年に亘って培われてきた繋がりは受け継がれている。

お風呂を借りに行ったり、お裾分けをしあったりする風景が日常であった石川町。民生委員・児童委員の市田重昭さんは「石川町を『大家族村』といっています」と話す。

石川町の行事として受け継がれる二百十日祈願祭。二百十日に「大家族」の安全と無事を、幸せを願って集う一日である。